

当たり前

2024. 3. 11

人は、経験という名のキャリアを積み重ねるほど、自分の当たり前に対する確信を深めていくように思う。今までは、これまでは、という前例に、知らず知らずのうちに固執していく。そして、そのことを自覚できていない。

何か新しい行動を起こそうとする。その際、立場や上下関係を意識してしまう。受け入れてもらえるはずがないと、尻込みしてしまう。その一方で、管理職や同僚からの依頼には、できます、やりますと半ば条件反射的に反応してしまう。

新たな取組がいいのか、よくないのかを判断する際に、その内容ではなく、その取組の発信者が誰なのかという点から判断してしまうことはないだろうか。これらは、無意識の偏見や思い込みであり、偏ったものの見方や捉え方である。

世の中は、無意識の偏見であふれている。「6D型思考」というものがある。「どうせ」「でも」「だって」「ダメだ」「できない」「どうしよう」の6つである。「でも」「だって」「できない」は、よく聞く言葉である。条件反射的に、とりあえず、「でも」という人もいる。よく考えずに、「できません」という人もいる。

「サンクコスト効果」というものがある。これまで費やした時間と労力という名のコストの存在がちらつき、やめた方がいいことでもやめられなくなることである。これは、学校にも当てはまっていないだろうか。

学校は、手間暇かけて積み上げていく取組の宝庫である。その最たるものが、行事である。入学式、卒業式、始業式、終業式などの儀式的行事、文化祭、学習発表会、合唱コンクールなどの文化的行事、運動会、球技大会などの健康安全・体育的行事、遠足、修学旅行などの旅行・集団宿泊的行事、職場体験活動、ボランティア活動などの勤労生産・奉仕的行事など、枚挙にいとまがない。せっかく積み上げてきたものを手放すには、それ相応の勇気が必要となる。だが、過去の蓄積が未来の判断の足かせになる場合もある。

また、人は、過去の栄光にいつまでもすがりたいものである。昔はよかった。あの頃はよかった。自分にとっての過去の成功体験からは、なかなか離れることができない。こうした思考は、現状を嘆くだけでなく、意味あるチャレンジをも否定してしまうことにつながりかねない。

振り返ってみると、我が教員人生は、“当たり前”との闘いだっただけのように思う。そこには、内なる闘いと外との闘いがあった。この闘いは、これからも続く。いや続けなければならない。